

No. 60

2005

2月1日発行

萩の郷

発行者
下市田区
発行責任者
大屋敷 清利
印刷
下市田・キタバヤシ印刷

ことほ
心厳かに新春を言祝ぐ



平成17年は雪とともに明けた。

新年は銀世界の中で迎えた。全てのものが白一色につつまれ、すがすがしい気分の中の初詣となった。やはり元旦は雪の中がふさわしい。凍てつく寒さの中、身も引き締まる思いだった。

昨年ほど「災」の字があてはまる年はなかった。台風と大雨、猛暑、地震。どれ一つをとってみても「未曾有の」とつけても良い天災であった。

もう一つ、身近には凶悪な事件も起き、鍵の必要のないことを誇りにさえ思っていた我々を、あらためてこも都市型になったかと、愕然とさせられたものだ。

それらの災いは、まさに天から与えられた試練であり、天の怒りではないのかと思うと、もはや天災、人災の垣を越えて、人間はもっと謙虚に、もっと真摯にならなければならぬと思う。

そうした中で、幸いにもこの萩の里は大過なく、心豊かな新年を迎えることが出来ただけけれど、そんな時こそ、身を引き締め、みんなで共に歩む心こそ持ちたいものだ。災いを自身のものとして捉え、助け合う心を培うことが、災害に備える第一歩であること、肝に銘じたい。



開通した湯ヶ洞街道

それだけに、家屋の移転、用地の確保等、地権者各位のご理解ご協力なくしてはできなかつたことである。これを推進された方々のご苦労もいかに大きかったことか。併せて謝意を表したい。愛称は「湯ヶ洞街道」と命名された。この道路が愛称と共に多くの人々から親しみ愛され役立つことを切に願うものである。

次に、朗報として、下市田三区高寿会が全国老人クラブ表彰された。長年に亘る継続的な活動が評価されたもので、敬意と共に祝意を表したい。いよいよ春祭りも近づいてくる。昨年は、御柱で沸き返ったが、獅子の笛の音にも郷愁を感じるこの頃である。

区の情勢について

区長 大屋敷 清利

新春を迎え、区民各位のご健康を祈念致します。区報も六十号を迎え、昭和五十九年創刊以来二十一年の歩みを経て今日を迎えた。区の歩みを留めて更に前進を期待したい。昨年は、天災人災の続発で「災」の一字で表現されたが、下市田区内には大きな災いがなかったことは幸いであった。事業としては、健康センター（既報）と湯ヶ洞街道の完成があった。ふるさと農道湯ヶ洞線は、長野県の「ふるさと農道緊急整備事業・湯ヶ洞地区」として、平成五年事業開始以来、実に十二年の歳月を経て、暮れの十二月十八日開通式典が湯ヶ洞線と県道分岐点の現地で行われた。又、下市田関係者は、区民会館で祝賀会を行った。事業量は、延長三・二キロメートル、幅員八メートル、内歩道一・五メートル。総事業費約二十六億円。国道からハーモニックロード（上段道路）まで、途中に県道とは立体交差している。町内道路の中で下段から上段へ通じる道路として最も整備されたものである。

新任氏子総代の紹介と新しい体制

氏子総代 池田達雄

二〇〇五年、明けましておめでとうございます。四年前に任期の改正で、三人ずつ交代と言うルールで発足しましたが、早くも四人交代で発足しました。二年務めただけで責任者とは、経験不足で祭事が一〇〇％催行できませんか不安一杯。御祭事も大変ですが、本殿・荒神社・御射山と、区の重要な文化財の維持・管理の大切さを痛感致しました。

氏子・老人クラブの皆様「湯ヶ洞街道」と命名された。この道路が愛称と共に多くの人々から親しみ愛され役立つことを切に願うものである。次に、朗報として、下市田三区高寿会が全国老人クラブ表彰された。長年に亘る継続的な活動が評価されたもので、敬意と共に祝意を表したい。いよいよ春祭りも近づいてくる。昨年は、御柱で沸き返ったが、獅子の笛の音にも郷愁を感じるこの頃である。

委員会活動報告

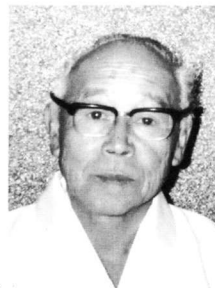
消防委員長 佐々木

消防委員会では防災研修会を十月三十一日区民会館に代議員、自衛消防、消防団及び区民の皆様の出席を頂き開催しました。ちょうど干柿の加工時期と重なり五十名程で、参加者は少なめでしたが、一週間前に新潟中越地震が発生したこともあり、参加者は真剣に研修を受けていました。開催内容は、最初に「二十世紀日本の地震災害」のビデオ上映にて過去の地震災害に

の清掃御奉仕を頂く中で、私達も奉仕者として見苦しい社殿にならない様務めて参ります。

生々しい話ではありますが、二年参りの後、お賽銭箱の整理を致しました処、お札の枚数が前年の四倍のご奉納が御座いました。昨年の悪しき年が、今年は良き年でありますようにとの思いが込められたと拝受致しました。

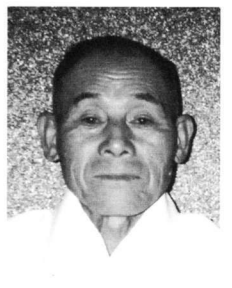
氏子の皆様方が幸運を西に込めれる事を、御祈念致します。



三村 修



福島秀晃



池田達雄



甕 三郎



小川真澄



林 隆俊

ついて研修しました。その後、長野県政出前講座・長野県危機管理消防防災課の高野さんによる講演を行いました。東海地震が起きたことを想定して実際にどう対応していくのか検討しました。震度6弱の地震が発生しました。①あなはどのような行動をとりますか。まずは家族の安全確認及び避難場所の確認。②次に何をしますか。初期消火及び非常持出し品の確認等。下市田区の地図を広げながら検討しました。実際に災害が発生した時は「自分たちの地域は自分たちで守る」という連帯意識を持ち取組むことが地域活動の基本です。近い将来、東海地震が発生することが予想されます。非常持出し品（貴重品、携帯ラジオ、懐中電灯、救急医薬品、非常食等）の点検補充、家具・電化製品の転倒防止、我が家の耐震診断、避難場所の確認等、出来る事は早めに行っておきましょう。普段より近所、地域との連携を図り災害時に協力協調できる様お願いします。

ふるさと祭り おしるこ出店の歩み

今年もおしるこ大好評！
写真は昨年の賑わい

町のおしるこ

と祭りのテンと村が始まったのは平成六年ですが、下市田の「おしるこ」の出店はそれから二年後の平成八年からのようです。六年「おしるこ」の第一歩と

なりました。

また同じテントの中で史談会が整理、修復した区有古文書等の展示、芸能保存会は新調した獅子頭をテント中央へ飾り、立て看板には「躍進、昔の下市田郷、今の下市田区、紹介の館」と書いてあったそうです。

その翌年(平成九年)からはコミュニティ活動推進委員(副区長、公民館支館三役、分館長、区選出コミュニティ活動推進委員)、分館主事、女性ふるさと各代表者が主体になって出店する事になり、平成十一年までは史談



会が行う下市田の歴史文化の紹介などと共に同じテントの中でやってきました。しかしあのテント村の雑踏の中では貴重な古文書や絵図を落ち着いて鑑賞できる環境でないという反省から平成十二年からは史談会等の展示は文化祭の会場へ移し、下市田のテントはおしるこ一色となり今日に至っております。

また、平成十二年には「おしるこ」専用のあの鍋や餅焼器、それに色鮮やかなスタッフ用のエプロンも新調し、その後バンダナも着用することになった。今日では下市田の「おしるこ」独特のスタイルが定着した形となりました。

なお、おしるこの容器も十二年度からは発泡スチロール製のものから紙製のものに替え、後の処理がし易くなった。好評に応じて本年度は二二〇〇食を用意したが半日分が一時半で終わってしまいう相変わらずの盛況ぶり。「あぁおいしかった」と言ってお腹いっぱいになった。

所定の入れ物にきちんと入れて行くマナーが定着しつつある事もうれしい。取り組んでくれたスタッフの労に深く感謝したい。

文責 木下豊



新刊図書紹介

支館図書の平成十六年一月から十二月までの利用総数は、百五十冊。昨年度とはほぼ同じ利用状況です。利用してくださる方も同じような顔ぶれでした。新年新たに部員総出で三十六冊の本を購入に行ってきました。話題のベストセラーを始め、料理の本まで多様な分野がそろっています。多くの方が気軽に来館し本を利用していただきたいと思っています。

利用方法

- 一、来館した折にいつでも借りられる。
- 二、図書貸出簿ノートに記入するだけ。
- 三、貸出期間は一ヶ月

購入図書 一部紹介

風の陣、ヤンキー母校に生きる、親のこころ、蹴りた背中、硝子のハンマー、あなたは死ぬまで騙される、香峯子抄、キツパリ、世界一の金持ちになってみる、弁慶、ハウルの動く城、空中ブランコ、人生の達人たち、昔の食事、いま会いにゆきます、



平成15・16年度 公民館活動を振り返って

代議員会長

松島修三



物だと思っています。区報・館報の発行、地元町議との懇談会、夏祭り納涼祭、そして盆野球、秋の文化祭り・敬老会、ふるさと祭り参加。冬はペタンク大会、春が来ればお祭りとして一年中大変な事だと感服して来ましたが、公民館事業が区民老若男女の接着剤だと考えます。更に此の様な下市田支館活動の合間へ、それぞれの地区分館がその地区の伝統と要望を受けて独自の活動を実施して来ましたが、考えてみれば「お見事」の一言につきまします。公民館関係の役員さん、またそれぞれのグループをリードして積極的

に活動に参加された方々、大変ご苦勞様でした。しかし皆さんを中心にした公民館活動が盛んに行われた故に下市田は「皆んな仲良く助け合って暮らせる良い所だ」と近隣から羨ましがられ、これからも穏やかに平和に榮えて行くものと信じます。

支館部長

宮外正彦



質問事項を議員の方々に配ってあったので、明確な返答を頂く事が出来ました。萩の里祭りは一年目準備の段階で少なからずとまどいがありましたが、二年目は楽勝でした。文化祭りは一年目の反省を生かして、無事終了致しました。

常々考えて来ましたが、下市田区の公民館事業は大変です。単なる自治行政と違って、常に住民サービスに徹底した奉仕の要素が求められます。個人の利害が優先されがちな昨今、この大所帯の下市田区が仲良く住み良い地域として、今在るのはこの公民館活動の賜

を得て、さらに分館長・主事会という良い組織にも助けられ、今日まで数々の事業を無事に遂行する事ができました。「萩の里祭り」踊りの舞台作りは分館長・主事の仕事と分担が決まり、昨年まではその道のプロが指導に来て下さって、我々はお手伝い位の気楽な立場でいましたが、今年度は事情で私達のみで舞台作りとなりました。一区の夏祭りに同じ規模の舞台を組み立てると

公民館の活動は例年と同様三つの行事を行いました。町議との懇談会は議員全員の出席の元、質疑応答形式にて行いました。前年度までは、即答できないものは、検討して返答するということになり、結果が判らずじまいになっていたが、十六年度は、あらかじめ前年の

全部員が交代により、一年目は不明な点が多くありました。部員は男性十人、女性十人の二十人ですが、各人それぞれ得意分野があり、何でも出来るものだと思います。それぞれに家庭の環境、職場の事情があり、特に女性は子供、老人を抱え、又共稼ぎの中での出席であり、頭の下がる思いでした。又有能な支館三役の適確な指導と、助言により成り立ったものと感謝するものであります。

分館長会長

松岡修二



聞き、皆で早速に向かい研修し、本番に備えました。その甲斐あって当日は見事な舞台上に仕上がりました。満足の。俺達にだって出来たぞと、夜は祭りのビールに酔いました。舞台を明るく

「文化祭り・敬老会」多くの皆さんに楽しんでいただける様にと、事前の準備から当日、そして片付けまで役員の皆さんと協力し、心を一つにして精一杯のお手伝い。

支館以外の事業も多く、忙しい中でも心待ちして欠かさなかった毎月の打合せと懇親会。公民館活動に

県・町よりの補助金の削減により、区も公民館も今後益々の予算の削減が予想されます。公民館活動もよりボランティア的になるものと予想されます。そんな逆風の中ではありますが、来年度以降の下市田区と公民館活動の発展を心より願っております。

任期も残りわずかとなりました。各区から分館長・主事の大役に選任され、不安を抱きながらも先輩諸氏、区民の皆様のご指導と協力

規模の舞台を組み立てると

思っています。

公民館活動に

公民館活動の発展を心より願っております。

地域密着型公民館時代

一区 北 島 剛



私は下市田公民館には平成三、六年の間お世話になりました。それ前は一区の部落長正副を四年間担当、代議員として公民館に関係していました。

公民館は昭和二十一年に戦後の復興、郷土の復興を

区報六十号を祝って

五区 下 井 武 平



区報六十号発刊に当り、雑感を述べさせていただきます。

昭和五十八年、当時の区長林直輔さんが、町には「広報たかもり」「公民館報たかもり」が月々発刊されているが、区にはこの様な

活動を部落長と共に盛り上げるように発展してきた。

当時は、地区対抗の卓球、ソフトバレー、スローピッチソフトやカラオケ大会が地域づくりを盛り上げた。

分館行事は現支館行事と同じ、萩の里祭り、文化祭り、敬老会、町議との懇談会も続けた。区報も三十号を初めてカラーで発行。

平成十年に町公民館の改革により十三分館が三支館二十一分館に改正、下市田の各組が活動し易い分館となる。以上区報の発展を祈り文を閉ず。

等何回も東京迄出張されましたが、最終的には区の勝利となり、今の六地藏、藤棚があるわけです。

次は神社の宝刀の件です。色々の事情により結局行方不明になりましたが、この刀は川中島合戦の折、上杉謙信が武田信玄に切り付けた刀と同じ「備前長船」の名刀だったのです。大変残念です。

終りに、今後も区・公民館の御骨折りと、それぞれの皆様方の御協力により、益々有意義な「萩の郷」に発展されることを祈っています。

萩山郷土芸能保存会

幹事長 岡 村 勝 吉



下市田区の皆様には御家族をお揃いでお健やかな新年をお迎えの事とお喜び申し上げます。

昨年十二月四日平成十六

年度萩山郷土芸能保存会の定期総会が行われ、図らずも私が十七年度の幹事長を仰せつかり、元より何も出来ない私が引受けする事になり、保存会執行部運営委員の皆様方のお力添えを頂きながら精一杯努めたいと思いますので、御協力と御理解をお願い申し上げます。

十七年度の幹事長始め部落幹事は、

落幹事は、

平成十七年度

幹事会役員

幹事長	六区	岡村勝吉
副幹事長	五区	岩下智
会計幹事	三区	古瀬栄一
副会計	四区	林義彦
備品幹事	五区	中平信明
副備品	一区	田本俊明
幹事	一区	麦島高一
	二区	上原修
	二区	上沼建司
	三区	山崎己達
	四区	土岐哲生
	六区	古瀬三千夫
囃子部	部長	寺沢正勝
	副	上沼豊美
		原文夫
獅子部	部長	有賀重信
	副	上沼宏一
		三浦喜久夫
		三浦伊佐夫



平成十六年十一月吉日
萩山郷土芸能保存会

下市田のみなさん

こんにちは

映画『帰らざる日々』の故郷

二区出身 西村 雅史

(名古屋市在住)



昭和四十四年高校を卒業し、名古屋の大学に入学、そして就職。名古屋に居を構え現在名古屋支店に勤務しております。

故郷を離れ三十五年余ですが、田舎と名古屋の距離感も随分短くなり、飯田線で四時間かけて名古屋に出ていた頃の事を思えば隔世の感があります。とは言え『故郷』の言葉には都会育ちの人々にはない特別の感情があります。

今から三十年近く昔、帰省も滞りがちだった独身時代。アリスの「バイ・バイ・バイ」の音楽と共に思い出すのは昭和五十三年。藤田敏八監督が飯田地方を舞台に描いた青春映画『帰らざる日々』です。永島敏行

江藤潤、竹田かほり、朝丘雪路が出演していたと思いますが、昔の明神橋や市田港も映っていました。

飯田に向かう電車の中で高校時代を回顧する物語ですが、切なく、少し照れくさく、そして温かい場所としての故郷がノスタルジックに描かれ、当時の私の心情に『故郷』がより強く刻まれたのを思い出します。

今年の三月より名古屋に

随想

堀に立つ柿の古木

四区 唐木孝治

冬の紺碧の空に、黒々とその枝を伸ばす柿の木が二本。松岡城址三の堀の北の

はすれに、竹藪に囲まれながら生命をつなげる二本の柿の古木がある。幹は腐りが入り、太さを増すこともできずにいるが、毎年秋には、少し小ぶりの柿の実をつけ、その存在を誇示している。

昨年七月、この柿の古木

の命を長らげるために、腐りを除去し、堆肥を埋け、アリの巣を退治した。県内でも稀にみる良好な残存状態で残る松岡城址の堀に立つ柿の古木。市田柿発祥の地に城址と柿の古木は、過去と未来をつなげる、時空間である。松岡城址愛護会の努力によって、斜面に刻まれた堀の竹藪は、次第に切り開かれ、城址の全容を目にする日も、そう遠くはない。町の段丘と農業景観が、

我が執務日誌「回顧録」

五区 橋本 恒夫

「校長先生、今日の話を良かったよ。ただね、話の内容には関係なかったからよいけど、一ヶ所、日にちが違っていた所がありましたよ。どうです、私たちは間違いに気づくだけ講話を良く聞いているということをつてくれるよね」

こんなこともあった。例のごとく校長講話が終了して間もなくのことであった。七人の三年生の女子が校長室を訪れた。この時ほど赤恥をかいたことはない。

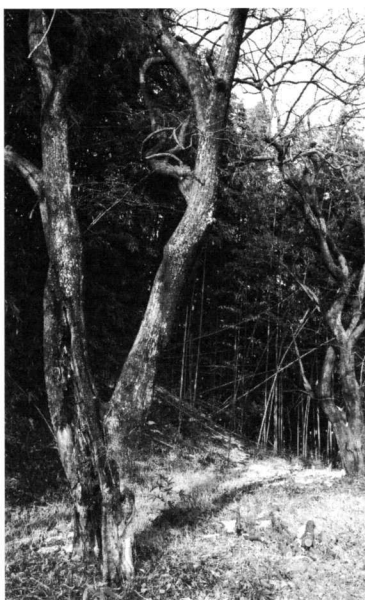
「校長先生、今日の講話グツときたね。しかしなんですか、先生のズボンの前チャック開いていたよ、恥ずかしかったらもう、気をつけて下さい」七人の生徒達は笑いをこらえて校長室を出ていったが、私はおかしいどころか赤面の至りであった。校長講話は、全校生徒に対して直接かわることの

心であってはならない。これから来る時代の変遷を見極めながら、自分たちが住む地域をどうしたいのか。地域住民が、各々の暮

らしの中で、燃焼すべき生命と、生きる実感としての大切な心を、見つけなくてはならない時代が来ている。



できる唯一の授業である。その子供達に何を語るかは重要なことである。それは、日々生徒達と接することが出来る学級担任は、話の内容の修正や付け加えができて、それができない月二回の校長講話はそれこそ真剣勝負、一発勝負である。今日は校長会で教育会館に出張。鞆を提げて校長室を出ると生徒達がどこからともなく「校長先生どこへ行くの」と声をかけてくる。「これから会議だよ」と答えると「いつてらっしゃい」と暖かい声をかけてきてくれる生徒達。この生徒達のためにも頑張らなければならぬと誓う毎日であった。



二本の古木、手入れ前
2004年3月撮影

わたしの作文

ぼくの作文

ちよつと息抜き

中三 吉岡香葉(二区)

中学三年生もあと少しとなり、高校受験までもう間がなくなってきました。この時期になると、大変なのが勉強です。受験生ともなると、朝起きて学校に行ってから夜寝るまでのほとんどが勉強の時間になります。ですが、いくら勉強が大切だといっても起きてから寝るまでずっと勉強していても息がつまってしまう。土曜日から日曜日のどちらか

に近くの公園まで行って息抜きをする。お昼ご飯を食べて午後になったら公園まで行き、そこでスケッチをしたり鳥の声を聞いた。こんなことをしていると、とても心が休まり、また次の日から勉強を頑張るぞ！という気持ちになります。それでもさすがに毎回一人でやっているとは何だかつまらない気がしてくる時もあります。そんな時は、友達やペットの犬と一緒に行くこともしばしばあります。

どなかといえど大勢で行ってわいわいさわいの方が楽しいし気がはれていいかなと思います。私の息抜きの方法はこんな感じですが、世界中にはもっといろいろな方法で息抜きをする人もいるんじゃないかなと思います。本を読んだり、歌を歌ったりはたまた寝ちゃったり。どんな方法でもいいけど、やっぱり息抜きは大切

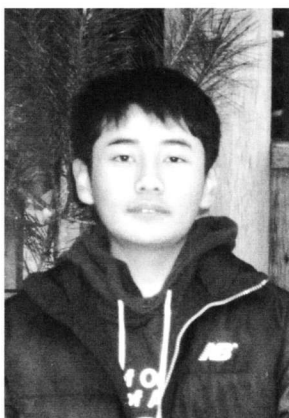


左から二人目が香葉さん

卒業をひかえて

小六 中村祥吾(三区)

ぼくは今、小学校六年生。もう少しで卒業です。まだ中学生になる実感はわかないけれど、今はうれしいような悲しいような微妙な気持ちです。制服採寸の時、学生服を着てみると、なん



もありません。仲のよい友達とはなるべく同じクラスになりたいけれど、もしなれなくても新しい友達を作りたいです。また英語など新しい教科もあり難しそうです。

同じクラスの友達と過ごせるのも、後四十日位しかありません。毎日を大切に、みんなと楽しく過ごしたいし、早ね早起き等家での生活も整えて、中学生になる準備をしたいです。

だか自分が変わったような気がしました。ぼくの上の兄は四月から社会人になり、下の兄は大学生になりました。ぼくは十年後どんな仕事をしようとしているのか、楽しみです。将来の夢はまだはっきり決まっていませんが、その内じっくり考えて決めたいと思います。

同じクラスの友達と過ごせるのも、後四十日位しかありません。毎日を大切に、みんなと楽しく過ごしたいし、早ね早起き等家での生活も整えて、中学生になる準備をしたいです。

だか自分が変わったような気がしました。ぼくの上の兄は四月から社会人になり、下の兄は大学生になりました。ぼくは十年後どんな仕事をしようとしているのか、楽しみです。将来の夢はまだはっきり決まっていませんが、その内じっくり考えて決めたいと思います。

編集委員研修旅行 安曇野への旅

十一月二十八日朝八時、区長副区長さんをはじめ総勢二十六名は、青い空の下安曇野を目指し区民会館を出発しました。マイクロボスの中では、二年間の公民館活動を通して交流も深まった。この様な行程でしたが、日帰りの短い時間の中で、全員楽しい時を共有できました。残り少ない任期ですが全員で協力し、編集旅行の様に明るく楽しく活動して行きたいと思っています。

位置する風光明媚な地です。溪谷には三つの発電用のダムがあり、その内の一つ七倉ダムを見学しました。続いて大町エネルギー館へと向いました。体験型の科学博物館で、エネルギー全般



七倉ダムにて

地域の紹介

湯ヶ洞街道の開通

四区部落長

林 一雄

四区は九十九戸の、下市田では一番こじんまりした部落です。その四区の南端南大島川沿いに

近頃大きな変革がおりました。湯ヶ洞街道の開通です。国道一五三号線から湯ヶ洞温泉まで三・二km、幅員八m、二十六億円の事業費だそうです。よくまあ、こんな困難な事業を完成させたものだと感じております。

ます。

話は平成五年頃、今から

十一年位前に

なりませんが、地区計画で現在の町道南大島川線を一位北側の土手を利用して拡張してもらいたいと、提出したことに始まります。

ある時町から八m道路に改良しよう。九戸の家屋移転が必要になりますとの説明に、地元関係者は、あいた口がふさがらないくらい、びっくりしました。その後関係者との協議は困難を極めました。十二年の年月をかけて十



二月十八日開通式が行われました。出来上がってみれば、大変便利になり、将来の発展も望める希望も出てきました。

子供御輿とチビ子タイコが四区から出演し、関係者の意を代表してくれました。タイコの音が「みなさんおめでとう」と言っている様に響きました。

グループ紹介

「もみじ会」

六区 池野多美恵

私たち「健康を考える料理の会、もみじ会」は、発足致しまして二十数年を経まして、食の大切さを益々実感して、月に一度お二人の先生にレシピをお願い致しまして、アイディアも加わった、大変心も豊かになるおかず作りを勉強しております。



年中行事と致しまして五月頃に地域の高齢の方々三十八名ほどをお招きしまして、季節に合わせて、日頃教えていただいた料理を会員とともに食べていただくことを致しております。このことは高齢の方々も大変楽しみにして下さっているらしいです。なので、会と致しても、ずっと続けて行く事の一つです。この頃は健康体操や、ゆび運動、歌を歌ったり、なぞなぞ遊びを考えたり、約二時

区民会館大掃除

師走を迎えた十二月五日日曜日、午後二時から三時半まで、各区の分館長・分館主事の皆さんと、支館三役・支館部員によって、区民会館の大掃除が行われました。支館長より「くれぐれも怪我のないよう行って下さい。」との言葉を胸に、高い三脚に乗って天井のすす払い、窓ガラス拭きを行う人、掃除機をかける人、ぞうきんがけと、それぞれ割り当てられた分担がきれいに磨かれ始めました。師走といえば、我が家も年

編集後記

萩の郷第一号が刊行されて以来二十年の歳月が流れ、今回、六十号記念の節目を迎えました。光陰矢の如し、正に「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり」です。

十年前に「区報・館報」と改称、五年前に紙面を広め、親しみ易い情報交換の場としても、区民の方々に愛され支えられてきました。その間、編集を通して大勢の協力、提言により、幾度かより良きものへの情熱を燃

末の大掃除をしなければいけませんが、こんなに大勢で掃除してくれたら、さぞ早かろうに、いやいや、こんなに大勢の人が我が家へ来てくれるには、その前に大勢の力を借りなければいけません。余計な事を話しながらも、ききと手を動かし、最後は台所のガスレンジや流しを皆でピカピカにして、大掃除が終わりました。毎回安心して使わせて頂いている会館。今年も一年間ありがとうございました。

支館部員

やし続けられたことか——そして、何人の先輩が区民の負託に答えて汗を流し、輪を広げて去って行ったことか——感慨一人の想いが胸を打ちます。

今期六回目の編集を終え、本号が任期最終回のお届けとなりました。この間に、お寄せくださった数々のご支援ご協力を、改めて感謝申し上げます。

「萩の郷」が区民の和と憩いの場となり、更には、地域文化のかけがえのない担い手となる機関紙として、益々充実、発展されることを願っております。